

書評

『もうひとつの戦場』

岡田靖雄編著 (六花出版, 2019年)

中村江里 (広島大学)

本書は、1930～40年代生まれの4人の精神科医が、戦時下の精神障害者の状況や戦争が市民に及ぼした精神的被害について執筆した論集である。最年長で編者の岡田は1931年生まれ、敗戦時14歳で中学三年生であったが、他の三名は戦時中まだ生まれていなかったか幼年期にあたった。しかし恐らく、周囲にまだ生々しい戦争の傷跡が残る中で成長し、医師として診療にあたる中でも、戦争体験者と接する機会が少なくなかったと思われる。編者の岡田は、戦争と精神医療・精神医学に関わる問題の解明にこれまで幅広く取り組んできた。およそ20年前に岡田がこの問題を研究し始めた際、具体的に検討を要する項目として挙げていたのは、精神病院の実態、戦争体制構築や軍事研究への精神医学者の協力、戦時精神疾患、戦地特異現象、植民地精神医学、戦争犯罪の精神医学的考察など幅広く¹⁾、未だに解明されていない問題も数多く残る。

このうちとりわけ岡田が大きく貢献したのは、第一に戦時下の精神病院の実態を明らかにしたことだろう。具体的には、本書第I部「精神障害者の受難」で取り上げられる、戦時中の民間精神病院入院患者の死亡率の高さや、精神病院での Deng 熱実験の問題である。後者の問題に関わる松沢病院の医局落書き長『大東亜雑記』抄(本書付録として再録)も非常に貴重な史料だが、前者の死亡率算出の根拠となっている各病院の記念誌のような基礎的な史料でさえも、国会図書館などが体系的に収集しているわけではないのが現状であり、精神医療アーカイブズのさらなる発展が急務であると感じる。また、患者死亡率の高さの主因と

考えられる栄養不足に関しては、診療録の調査によってより具体的に明らかにできるのではないかと考えられる。

近代の総力戦が、軍人だけでなく市民の生活に対しても破壊的な影響を及ぼしたこと、場合によっては軍事偏重の医療・福祉体制のために、市民により過酷な状況を強いるものであったことに対する岡田の強いこだわりは、本書第II部「空襲・戦闘のなかの市民」にも表れている。第一章・第二章の資料紹介に加えて、野田正彰による第三章は東京大空襲の被害者、蟻塚亮二による第四章は沖縄戦の体験者、中澤正夫による第五章は原爆の被爆者をそれぞれ診療した立場からの貴重な考察である。いずれのケースも、晩年に至るまで深刻な精神的後遺症が続いたり、老年期になってから発症するなど、「こころの傷」という観点から戦争がもたらす長期的な影響を考えさせられるものばかりである。また、第三章・四章で紹介される日本軍による性暴力の被害者、中国の重慶爆撃の被害者、米国の復員軍人、オランダの戦争体験者に関する事例は、このテーマの国際的な比較調査の必要性を示すものであり、日本社会が抱える戦争のトラウマは、戦争の加害と被害の重層性を持ったものとして考察する必要がある。

なお、戦争がもたらす精神的影響に関して、軍人と市民を包括的に捉える概念が必要であるという趣旨の岡田の問題提起(58頁)には同意するが、基本的には軍事精神医療の場で、かつ患者に対して侮蔑的なニュアンスを持って用いられてきた歴史性を持つ戦争神経症という概念にこだわる必要はあるのかという疑問は残る。

現段階でさしあたり広く共有できる概念としてはPTSDの方が有力ではないかと思われるが、第五章で中澤が指摘するように、「一つの疾患、病態をもって、『こころ』の被害とすることはできない」という問題も非常に重要だろう。

また岡田の功績として、第III部第一章で取り上げられる、軍医・早尾庸雄が陸軍の依頼を受けてまとめた戦場心理研究を世に広く紹介したことも挙げておきたい。早尾に関しては、高崎隆治、吉見義明などによって戦争犯罪研究の文脈ではじめ注目を集めたが、『十五年戦争極秘資料集 補巻32 戦場心理の研究』全四冊(不二出版, 2009年)に岡田が寄せた解説によって、不明な部分が多かった早尾の足跡が明らかにされた。早尾の分析は戦場における軍隊の実態にかなり踏み込んだも

のであり、軍事史的にも非常に興味深いものだが、他の軍医も研究報告の前に軍の検閲を受けたようであり、岡田が示唆するように、早尾に対しても軍からの圧力があつたと考えられる²⁾。近年現実化してきた、科学者の軍事研究との関わりを考える上でも非常に重要な問題だろう。

文 献

- 1) 岡田靖雄：戦争と精神科医療，精神医学，そして精神医学者，15年戦争と日本の医学医療研究会，第3巻第2号：8～10（2003）。
- 2) この点に関しては，以下の拙稿で分析した．Eri Nakamura, "Psychiatrists as Gatekeepers of War Expenditure," *East Asian Science, Technology and Society* 13, no.1 (2019): 57-75.